

楽曲紹介

解説=野本由紀夫

ラフマニノフ (1873-1943)

ピアノ協奏曲第3番 二短調 Op.30

1/23

1/24

1/26

ロシア生まれの作曲家、ピアニスト、指揮者だったセルゲイ・ラフマニノフ (1873-1943) のピアノ協奏曲。第3番は、第2番と並んで人気の曲である。

1909年の夏(36歳)、同年秋に予定されていたアメリカでの演奏旅行で初演するために作曲された。ラフマニノフはソリストを務めることになっていたが、この曲のソロ・パートを、ロシアからニューヨークまでの船旅中に、音の出ない鍵盤を使って練習しながら、短時間のうちに覚え込んだという。

第1楽章 ソナタ形式の楽章。冒頭、ピアノで演奏される第1主題は、ロシア正教会の聖歌から採られたともいわれる。このメロディは、少しずつ形を変えて、他の楽章にも登場する。やがて、甘美な第2主題となるが、こちらも全楽章に登場する。ピアノのカデンツァはかなり長く、独奏者の腕の見せ所となっている。

第2楽章 変奏曲風のアダージョ楽章。冒頭のオーボエによる憂いをおびた主題は、短調の激しい部分でも、形を変えずそのまま登場する。大音響の陰では、ヴァイオリンによって第1楽章の第1主題も隠れるように登場している。ピアノから移行部となり、切れ目なくそのまま第3楽章へと入る。

第3楽章 行進曲風のリズムに導かれた、ソナタ形式の楽章。ピアノ・パートはかなりの超絶技巧である。展開部では、ヴィオラとチェロによって、第1楽章の第1主題の変形が登場し、その直後には同じく第2主題の変形がピアノによって優美に歌われる。その後、第2主題が情感をこめて歌われ、最後はエネルギーに閉じられる。

【作曲年代】1909年 【初演】1909年11月28日 ニューヨークにて、作曲者自身によるピアノ、ウォルター・ダムロッシュ指揮(翌年の再演は、ラフマニノフのピアノ、グスタフ・マーラー指揮で)

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバル)、弦楽5部、独奏ピアノ

ベルリオーズ(1803-1869) 幻想交響曲 Op.14

1/23

1/24

1/26

27歳になる1830年、ベルリオーズはフランスの名門作曲賞である「ローマ大賞」を受賞。ようやく新進作曲家として認められた。その記念すべき年に書いたさらなる成功作が、この『幻想交響曲』である。

この交響曲の正式のタイトルは、『ある芸術家の生涯におけるエピソード：5楽章からなる幻想交響曲』という。この曲の標題はあとから付けられており、ストーリーに沿って作曲した曲ではない。むしろ逆に、音楽に合うように4回も書き換えられた。

ベルリオーズが演奏会で配布した標題(楽曲解説)によれば、この曲のイメージは「失恋した若い芸術家が、アヘン(麻薬)を飲んで自殺を図ったが、致死量に達しなかったために死にきれず、奇怪な幻夢を見る」というもの。「若い芸術家」とはベルリオーズ自身、「恋人」とはイギリスのシェークスピア劇団の看板女優ハリエット・スミソンのことだ。

彼は1827年9月11日のパリ公演を見に行き彼女に一目ぼれ、その失恋から作曲……かと思うと、事実はそうではなかった。ベルリオーズは、国際派女優の知名度を利用して、この新しい交響曲のプロモーションを行ったらしい。

初演された1830年12月5日といえば、当時の「音楽の神様」ベートーヴェン(1770-1827)が死んでたった3年しかたっていない。「軍楽隊の楽器」やハープなど、多彩な楽器が取り入れており、当時さうとう過激で斬新な音楽に聴こえたに違いない。

第1楽章「夢一情熱」 作曲者の解説文は以下、太字で示そう。「恋人に出会うまで、彼は倦怠感や、漠然とした魂の渇き、憂鬱、当てのない喜びを感じていた」。ここまでが、序奏だ。

「それから彼女によって呼び覚まされた猛烈な愛、錯乱した苦悩、やさしさへの回帰、宗教的な慰めが起こる」。打撃音のあと、ヴァイオリンとフルートだ

1/23

1/24

1/26

けで呈示されるのが「恋人の主題」である。このメロディを「固定楽想(イデー・フィクス)」と呼ぶ。これが、すべての楽章を通じてさまざまにアレンジされることで、恋人に対して主人公がどのような立ち位置にいて、どのような心境なのかが感じ取れる。

第2楽章「舞踏会」 ワルツの楽章。ハープが2台も使われたのは、画期的だった。「舞踏会するとき、喧騒と華やかなお祭り騒ぎのなかに、彼は再び恋人を見出す」。中間部に「恋人の主題」が木管楽器で現れる。最後にクラリネットによる「恋人」が現れたと思うと、熱狂的に盛り上がって、舞踏会は閉じられる。

第3楽章「野の情景」 アダージョの緩徐楽章。「田舎の夏の夕方、彼は遠くで2人の羊飼いが笛でお互いに呼び合っているのを聴く」。ステージ上のイングリッシュ・ホルンと、舞台裏のオーボエによる、空間的な遠近法だ。この二重奏に気持ちを重ねて、「ほどなく[自分も]孤独ではなくなる」とつづく。「しかし、彼の恋人が再び心のなかに現れると、彼の心は千々に乱れ、暗い予感に襲われる」。恋人の主題が現れると、弦楽器が不気味な音楽を奏でる。最後は、「羊飼いのひとりだけが牧歌を吹く。日没。遠雷が聞こえる——孤独——静寂」。遠雷は、4人のティンパニ奏者によって演奏される、画期的なアイデア。

第4楽章「断頭台への行進」 ステージに注目すると、3人のティンパニ奏者、4人のファゴット(!)、人数を2人ずつに4分割したコントラバス(!!)、軍楽隊の金管楽器のホルネットと、宮廷オーケストラの金管楽器トランペットの同時使用、打楽器の多用など、斬新な楽器法にあふれた楽章。

「彼は恋人を殺した夢を見る。彼は死刑を宣告され、断頭台への行進を命じられる」。ちなみにこの楽章は、すでに1829年に作曲していたオペラ『宗教裁判官』の行進曲をまるまるリサイクルしたもの。標題(解説)のほうがあと付けなのは、明らかだ。

「行進曲のおわりに、彼女のことが一瞬脳裏をよぎるが、ギロチンの一刀両断とともについで」。フランス革命(1789年開始)からほどない時期のパリの聴衆にとっては、かなりエグイ音楽だったに違いない。

第5楽章「サバトの夜の夢」 「悪夢」のつづきである。「彼は魔女の祝日——それは彼の埋葬でもある——に参加している。幽霊や魔法使い、ありとあらゆる魑魅魍魎^{ちみもうりょう}に取り囲まれている。不気味な音、うなり声、嬌声、遠くからの叫び声、それに応える別の叫び声が聞こえる」。サバトとはヴァルプルギスの魔女の宴会のことで、4月30日から5月1日にかけての夜に行われる。

「恋人の旋律が聴こえてくるが、今やグロテスクで卑しい踊りになっている。彼女は悪魔の宴に加わる」。小クラリネットによって「恋人の主題」が姿を見せるが、下品な表情に変化している。彼女も化け物になっているのだろう。

「吊いの鐘、『怒りの日』のパロディが響く」。ここでは、しばしば本物の教会の鐘が用いられる。チューバなどで吹奏される『怒りの日(ディエス・イレ)』とは、グレゴリオ聖歌の「お葬式の賛歌」のことである。

「魔女の踊り。その踊りと『怒りの日』がひとつになる」。音楽がドンチャン騒ぎになっていくと、見事な盛り上がりを見せながら、一気に呵成に終幕を迎える。

【作曲年代】1830年 【初演】1830年12月5日 パリ音楽院ホールにて

【楽器編成】フルート2(2番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2(2番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2(エス[E♭]・クラリネット持ち替え)、ファゴット4、ホルン4、トランペット4(トランペット2、コルネット2)、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ(2名)、打楽器(小太鼓、大太鼓、シンバル、鐘)、ハープ2、弦楽5部 【バンド】オーボエ

のもと・ゆきお(音楽学・指揮)／桐朋学園大学助教授を経て、玉川大学芸術学部教授。NHKテレビ「名曲探偵アマデウス」監修、同「ららら♪クラシック」の解説者、Eテレ学校番組「おんがくブラボー」番組委員。NHK-FMラジオ「オペラ・ファンタスティカ」レギュラー解説者。昨年末、日本テレビ「世界一受けたい授業2時間SP」の「第九」コーナーに、指揮者・先生としてスタジオ出演。